



気仙沼の2022年3月10日。
本冊子 17 頁を参照ください。

東北ヘルプ ニュースレター

2022年イースター号

- 巻頭言：また、新しい「東北ヘルプ」へ 1 頁
- 東北ヘルプ関係地図 2 頁
- 被災後の日常に寄り添う
コミック紹介：じんのあい『星の輝き、月の影』 3 頁
- 原発事故被災地では、今
写真家 飛田晋秀先生 インタビュー 4～7 頁
- 計測所事業の ここまで と これから 8～10 頁
- 次の原子力災害への備えとして
「仙台食品放射能計測所・いのり」10年の歩みを回顧して 11～15 頁
- あとがき
津波被災地の二つの活動 16～17 頁
- 会計報告 18 頁

巻頭言：また、新しい「東北ヘルプ」へ

2022年は、不思議な年です。

2022年は、2011年と、「日付と曜日」が、ピッタリ同じなのです。

2011年の「3月11日」は、金曜日でした。その日に、津波が起きました。地震はその前から、頻発していました。そして、「3月12日」の土曜日、福島第一原子力発電所で最初の爆発事故が起きました。そして、「3月18日」の金曜日、仙台キリスト教連合は「東北ヘルプ」を立ち上げました。

2022年の今年、日付と曜日がぴったり重なる中で、その時のことを一つずつ、思い出しています。想像もできなかった出来事の数々。そして、それを上回る、全国・全世界から続々と寄せられる祈りと支援——改めて、皆様のお心に、感謝の思いを募らせています。

そして今年・2022年、「東北ヘルプ」はまた、新しく前に進みます。

まず、2022年3月15日をもって、「仙台食品放射能計測所・いのり」を終了します。「最後のひとり」となった職員の笠松さんが、退職されて東京へ行かれることになったのです。

そして、私がお預かりしてきました「東北ヘルプ事務局長」の職位も終了となりました。2022年6月の定期総会で「事務局」そのものを廃止し、私・川上が「代表」になり、さらに理事を増員する。これで、新しい「東北ヘルプ」が完成する、という段取りに入ったのです。

転機を迎える2022年です。今年も「3.11」が終わり、東北は「12年目の被災地」となりました。そこにはしっかりと根を下ろした支援者が着実に活動を展開しています。

宮城・福島の支援者を支援する、そのための、現時点での「最適形態」に、東北ヘルプの「模様替え」が完了しそうであること。そのことを、感謝を込めて報告いたします。

これまで「代表」をずっと務めて下さった吉田隆牧師には、引き続き理事としてお残り頂くことになりました。また「福島」と「女性」を念頭に、6月には2名の理事の増員が叶う見通しです。新しい理事としてご参画くださる方々、そして何よりも2011年からずっと「代表」の重責を担って下さった吉田先生に、深く心からの感謝を申し上げます。

ここに、ニュースレターの「イースター号」をお送りします。前号が「津波の被災地」の特集でしたから、今回は「原子力事故の被災地」の特集のようになっています。

全体は二部に分かれます。

前半は「原子力災害被災地の今」をご紹介します。「原子力災害の被災後の日常」に寄り添うコミックをご紹介しますから、「強制避難地」への帰還者の現状を報告するインタビューを掲載しています。

後半は「次の原子力災害に備える」ものとなっています。「3.11」を経て、「原子力災害避難訓練」も真剣に検討されるようになりました。原発事故は「起こる」ということ。この当たり前のことを、少しずつですが、世の中もまじめに考え始めているように思います。そしてこの原稿を書き始めた3月16日（水）深夜、「震度6強」の地震が原発を襲い、しばらくの間また、原発は「冷却不能」の状態が続きました。これが、2022年の現実です。その中で、「東北ヘルプ」は、原子力被災地における「食品放射能計測」の事業を展開してきました。今、その最初となった「仙台食品放射能計測所・いのり」の活動が終わり、その先へと歩みを進めようとしています。そのタイミングで、私たちの歩みを振り返り、「次の原発事故」への提言を語るのが、後半となっています。

「あとがき」には「津波被災地」の新しい支援活動を二つ、ご紹介します。今回も、一つずつ、指定献金をして頂ける工夫をしました。皆様の思いをつなぐ役割を、引き続き担いたく願っています。そのために、このニュースレターが用いられますように、心から願っています。

(2022年3月18日 川上直哉 記)

東北ヘルプ ニュースレター「2022年イースター号」関連地図



☢のマークは、北から順に
東北電力女川原子力発電所
東京電力福島第一原子力発電所
東京電力福島第二原子力発電所

- ① 気仙沼市:表紙と17頁を参照ください。
- ② 石巻市:「公益活動団体 Love is action」様が「コミュニティガーデン“黄金浜おむすび村”」を造ろうとしておられます。17頁を参照ください。
:「石巻広域ワイズメンズクラブ」様がランドセル発送の準備を整えた場所です。16頁を参照ください。
- ③ 塩釜市:「ライフワークサポート 響」様がランドセルを保管されていた場所です。16頁を参照ください。
- ④ 仙台市:「仙台食品放射能計測所・いのり」がありました。8頁以下を参照下さい。
- ⑤ 福島市:新しい食品放射能計測所を設置するべく、今、調整を進めています。11頁を参照ください。
- ⑥ 二本松市:写真家の飛田晋秀先生が放射能測定を依頼されたセンターがあります。4頁以下を参照ください。
- ⑦ 大熊町:写真家の飛田晋秀先生が2012年に撮影のために入られた場所です。4頁以下を参照ください。
- ⑧ 郡山市:食品放射能計測室が設置されている場所です。11頁以下を参照ください。
- ⑨ 広野町:写真家の飛田晋秀先生が2011年に撮影のために入られた場所です。4頁以下を参照ください。
- ⑩ いわき市 内郷:食品放射能計測所が設置されている場所です。10頁以下を参照ください。
- ⑪ いわき市 小名浜:写真家の飛田晋秀先生が「3.11」直後に友人から連絡を受け、駆け付けた場所です。
4頁以下を参照ください。

被災後の日常に寄り添う

コミック紹介:じんのあい『星の輝き、月の影』

「震災から、10年経ったのだ」と、しみじみ、感じさせられました。

『ビッグコミック』という雑誌に、2021年3月から連載されている漫画『星の輝き、月の影』の第1巻を読んだ、最初の感想です。

震災のような「大きな出来事」は、生々しすぎて、物語になりにくいところがあります。「生(なま)の体験談」は、語ることができます。でも、それを「物語」にすることは、なんだか不謹慎な気もする。そして何より、感情が逆立ってしまって、物語が、落ち着かない。そんな気がします。まして、「原発事故」であれば、なおさら、だと思えます。

でも、このコミック『星の輝き、月の影』は、物語としてきちんと読者を引き込み、丁寧に感情にしみ込んでくる。そんな漫画になっていました。

こうした漫画が出てきた。「なるほど震災から10年経ったのだ」と、しみじみ、思わせられました。

物語は、これが「震災」あるいは「原発事故」を扱っているとは全く感じさせずに、始まります。私はこの漫画を「知り合いの作品だから」と紹介して頂いて、読み始めました。「東北」が、きちんと描かれています。「都会」の輝きの前にくすんでしまう「田舎」であること。そこに住む人々の閉塞感に蝕まれている様子。自然は、美しい。けれど、でも、その価値が良くわからない。——それは、読む私の内側に痛みを感じさせるほどに、リアルでした。でも、それを、どこまでも柔らかい絵で描き出しています。だから、しみじみと、東北に寄り添うように、読者は引き込まれるのです。

主人公は、「東北」の外を見て帰ってきた女性です。「若い娘」としてばかり見られる周囲の視線を、とても疎ましく思いながら、暮らしています。そして、素敵な出会いがある。この「東北」の見えない可能性を見つめる人と出会う。そして、自分の故郷の素晴らしさに気付く。「ここで生きて行こう」と、心を決める。

そこに、原発事故が起こる。全てが、一瞬のうちに奪われて行く。共に生きて行こうと思った人も、何もかも、奪われて行く。——それは突然のことで、私は

「不意打ち」を受けたように思いました。まさに、被災者一人ひとりが、そうであったように。

私は、例えば飯館村の人々に、あるいは川内村の人々に、ここに描かれているお話を、いくつも聞いてきました。それは今、こうして「物語」となった。そのことを感慨深く思います。これで、あの大切なお一人おひとりの物語が、きっと、広く伝わって行く。そのことを、とてもうれしく思いました。

さらに、この漫画は、「仮設住宅」の生活を丁寧に描いて行きます。それも、私が様々に聞かせていただいた、その通りの「物語」でした。当たり前の「近所づきあい」が、いつもとても息苦しい。でも、日常は続く。こんなに近くに(近すぎるほどに)隣り合って暮らす人の、その正体が、分からない。ただ「故郷(ふるさと)」が、そして「被災経験」が、その垣根を乗り越えさせてくれる。そして、和解した「お隣さん」は、「新しい故郷」を造るために旅立って行く。その切なさ。自分は、どうしたらよいのだろう。宙ぶらりんの苦しさ。

まだ、コミックは1巻だけが刊行されています。「被災後の日常」は、この物語の中でも、まだ続きます。そして、本当に「被災後の日常」を生きる人々の今がある。その今へ、私たちの想像力を響かせ届ける力を、コミック『星の輝き、月の影』は、確かに持っていました。おひとりでも多くの方に、手に取っていただきたい大切な物語でした。

(2022年3月15日 川上直哉 記)

「被災地」で暮らし続けようとする人々の想いを、東北在住作家が描き出すヒューマンドラマ

じんのあい『星の輝き、月の影』第1巻
小学館、2022年2月



原発事故被災地では、今

写真家 飛田晋秀先生 インタビュー



2022年2月23日 仙台にて開催の「飛田晋秀 写真展」会場。現地の最新の写真と共に、飛田晋秀先生

福島県浜通りの原発周辺は、広く「帰還困難区域」が設定され、その住民は避難を余儀なくされました。その「強制避難地域」に、今、人が戻りつつあります。

その地域は、今、どうなっているのでしょうか。

その地域に戻った人々は、今、どのように暮らしておられるのでしょうか。

原発事故被災地を深く見つめ、写真に収め続けてこられた方がおられます。飛田晋秀さんとおっしゃいます。全国・世界各地で写真展を行い、講演会を勢力的に進めておられる飛田先生に、福島県で原発事故以後の日々をずっと暮らす人々を支援してきた木田恵嗣さん(牧師・東北ヘルプ理事)と一緒に、お話を伺いました。

(2022年3月23日 川上直哉 記)

—飛田先生、まず自己紹介をしてくださいますでしょうか。

飛田先生

もともと私は、歯科技工士をしていました。独学でカメラを学び、コンテストなどで入賞して、30代の後半くらいからカメラマン人生を続けています。私の故郷は「職人の町・三春」でしたから、「モノづくりの現場・職人」を30年来撮り続けてきました。つまり、私は報道カメラマンではないのです。

2009年から北海道から全国の職人の現場取材して回りました。九州まで終わり、全体をまとめようと思ったとき、2011年の震災となったのです。いわき市小名浜の友人と電話で話をしたら、「家の手前で津波が止まった」と言います。そして「今、ここはゴーストタウンになった」と電話で伝えられました。それで、行ってみたのです。そこでは、私の知人が8人も亡くなっていました。辛い悲しい出来事でした。でも、そうしたこともきっと、風化すると思いました。それで、私は報道カメラマンではないのですが、ともかくきちんと撮影をしようと思い、今に至っています。

—お撮りになった写真への反響はいかがでしたか？

飛田先生

2011年の4月末から3回くらい、福島第一原発からほど近い広野町に入って撮影をしました。その成果をもって、あちこちで写真展を開催しました。2012年には自民党本部でも写真展をしたのです。皆さん真剣に写真を見てくださいました。「政治家として、力を合わせてお手伝いをしたい」と言ってくださいました。今でもインターネットで「自民党震災写真展 飛田」と検索すると、その写真展の記事が出ると思います。



<https://yoshino88-exblog.jp/14848190/>

—何度も、大変な現場に入られましたね。

飛田先生

震災直後、ボランティア活動に忙しくしていました。体育館に富岡町から避難された方がたくさんおられました。そこで「現地へ来てください」と声をかけて頂きました。そのつながりの中で、2012年1月末に強制避難地に入ったのです。それから、原発立地町村の一つ・大熊町に、遠い親戚のつながりをたどって入りました。「何も変わっていない原発被災地」が、そこに広がっていました。防護服を着て1時間半ほどの撮影をしたことを、強い印象をもって覚えています。「もう1年になるのに、何も片付いていない」と、まずびっくりしたことでした。「町があっても人がいない」ということに、言葉を失いました。「何なのだ、これは」という思いを持ちながら、どこにも答えを得られず、異様な感じでした。実際、シャッターも切れない思いがしたものです。それ以来、何度も現地に行きました。

—いろいろな出会いがありましたね。

飛田先生

はい。2012年の8月のことを思い出します。小学校2年生の女の子と出会いました。私は「私はお嫁さんに行かれますか」と聞かれたのです。心臓が止まる気がしました。涙をこらえて、家に帰ったのです。車の中で、号泣しましたね。「こんなことを言わせてはいけない。自分は何ができるか」と、ずっと、考えています。それ以来、自分のライフワークを変えることにした。この出来事を風化させてはいけない。今後への継承を担おう。そう思ったのです。

木田先生

飛田さんに、私は、もう何度もお目にかかっていますね。その中で、印象的だったのは、福島県の子どもの「甲状腺がん」の衝撃的な写真を拝見した時でした。それから、私たちが主催している「福島県キリスト教連絡会」の学習会に、参加くださったこともありましたね。

—木田先生も、改めて自己紹介をしてくださいますか。

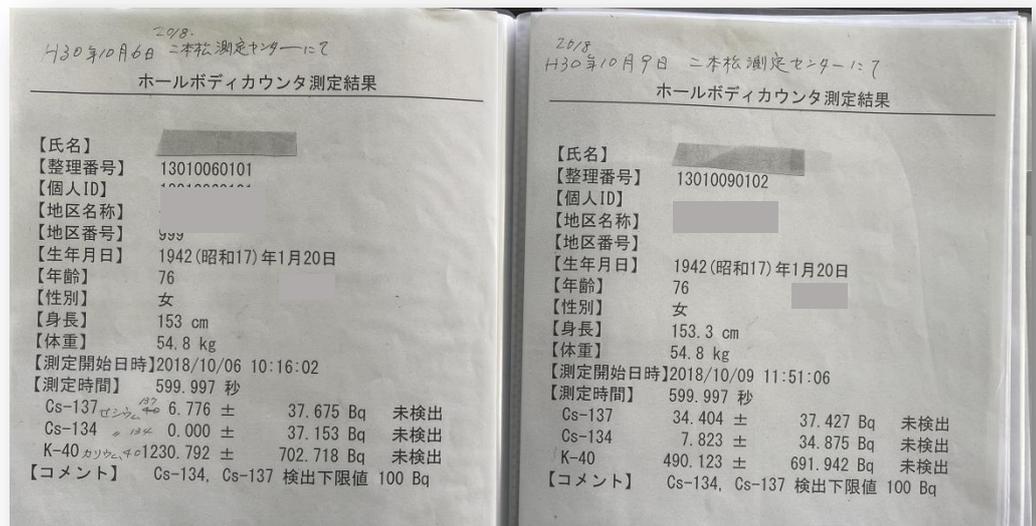
木田先生

私は郡山キリスト福音教会の牧師です。2011年に福島市の教会で震災を経験しました。その時、福島市に生まれた教会復興支援ネットワークの代表になりました。それが支援に携わった最初です。それ以来、「除染」「仮設支援」「子どもの保養」「汚染されていない野菜を配るプロジェクト」などを福島市でしました。2012年に郡山に異動しまして、「保養」のプロジェクトを拡大して県全体のものにしました。2019年春まで続けました。そして、東北ヘルプの「食品放射能計測所・郡山分室」が2013年秋に始まり、今も私がその責任者をしています。

—今回、飛田先生が衝撃的な資料をお分かち下さいました。この資料の経緯を教えてください。

飛田先生

これは平成30年(2018年)の資料です。10月6日、強制避難地の方が「ホールボディカウンター(体内に存在する放射性物質を体外から計測する装置)を試したい」と相談してられました。



信頼できる専門家が二本松市にいましたから、そのセンターで調べてもらいました。その時は、ほとんど数字が出なかったのです。次の日の夕方、電話があって、「知り合いの人が強制避難地のキノコご飯を押し付けてきて、一時間半くらい話し合っても『らちがあかない』ので、コオタケというキノコを、コップ一杯くらいの量、食べた」と言うのです。それで、9日にホールボディカウンターで計測してもらいました。すると、セシウムの値が、高く出たのです。びっくりしました。

—この資料は、飛田先生にとって、大切なのですね。

飛田先生

はい。今、強制避難地であった場所に帰還した人々がたくさんおられます。ほとんどみんな高齢者で、付近にはお店もあまりなく、現金収入にも限界がありますから、やはり、昔ながらの生活を取り戻して、山菜もキノコも食べているのです。そうした人とお話をしますと「大丈夫だ」と、そう言っておられる。「食中毒のようにはならない」と。「そういうことではないのだよ」と話しても、ピンとこないのです。なかなか、通じない。でも、この数字を見せたら、びっくりなさいます。

行政が「食べないように」とアナウンスしている食材がいくつもありまして、その「お知らせ」も出ているのですが、やっぱりピンとは来ないのです。周囲がいくら心配を伝えても、「大丈夫」で押し問答となってしまふ。それで、生活のためです。結局、食べてしまうのです。でも、この資料を使って「危険だよ」と言ったら、はっきりと分かってくれました。本当に「数字」が大事だと思いました。

木田先生

キノコだけではなくて、いろいろなものが、行政から「食べないように」と注意喚起されていますね。栗ご飯を食べて、ホールボディカウンターでの検査に引っかかったという報告を聞いたことがあります。しかし、キノコの食前・食後の資料は、初めて見ました。

飛田先生

実際、行政も注意喚起している通りなのです。あるキノコを、平成30年9月26日に調べてもらいましたら、生のままで「5,296 ベクレル/kg」ありました。それを一年かけて自然乾燥させて、もう一度測りましたら「21万8千ベクレル/kg」を超えていました。あれは、驚きましたね。かつて強制避難地であった場所の「道の駅」で、通りがかった人が、「このキノコはうまいぞ、食ってるぞ」と話しかけてこられたので、先ほどの数字を言ったら、黙って帰っていかれました。そうした場所では「イノシシの肉を食っている」という人も、結構いるのです。少しでも被ばくから体を守ってほしいと思って、私はこの資料をお見せしているのです。

—「福島復興」が熱心に語られ、「帰還」が促されていますね。
でも、その実際は、ほとんど伝わっていない。

飛田先生

最近も関東などで話をする機会がたくさんあります。毎回、たくさんの方が集まります。世間は決して、原発事故の被災者を忘れていません。先日も「コロナ」の時期でしたが、東京の世田谷でお話をした時に、70人規模の会場で、満席となっていました。

—最近では仙台市でも写真展を開催されましたね。

飛田先生

はい。仙台でも、かなりの集客となりました。最終日に私は講演をしました。会場は、しんとして、涙ぐむ様子でした。



——その他、どんなことが、強制避難地域だった場所に起こっていますか？

飛田先生

「帰還困難区域」という指定が、あちこちで、どんどん解除され、「帰還」が促されています。そうした中で、固定資産税の問題が浮上してきています。今までは、払わないでよかったのです——「帰還困難」なのですから。でも、帰還したら、そうはいかなくなります。まだ家屋があれば、それほどの負担になりませんが、もう震災以来「そのまま」ですから、どうしても更地にするようになりますでしょう。そうすると、固定資産税は「6倍程度」高くなるのです。それから、「墓地」の放射線料が高くて、埋葬できないというお話も聞きました。実に「100体以上」納骨できないご遺体があるというのです。そうしたことが「他人事」と感じる人が世間に増えれば、帰還した人々は孤立してしまうわけです。

——帰還した人々の「孤立」が問題ですね。

飛田先生

はい。帰還した人の孤立が、大問題です。「1 マイクロシーベルト/h」という、とても高い放射線量が確認される場所が、あちこちに点在している、そうした中で生きているのが「帰還した人」の現実なのです。除染した場所の放射線量は低いのです。けれど、そんな場所ばかりではない。それなのに、「そんなこと、たいしたことない」と扱われているのです。

木田さん

それは本当に「たいへんなこと」なのだと思います。その大変さを可視化したいと思います。計測に行きたい。ホットスポットファインダーを持って、行かせてください。

——甲状腺がんの問題は、どうでしょうか。

飛田先生

小児甲状腺がんを患った方々の多くが、もう大人になっています。その方々のことをお話しする中で「そんな事をなんで心配するのか」と、厳しいことも言われました。でも、詳しい話を聞いて頂ければ、みんな、分かってくれます。例えば、放射性物質が降り注ぐ中で、数時間、屋外で待機させられた子どもが甲状腺がんになった。けれど「そんなことを知られたら、就職もできない」と周囲から強く言われた——という事例を知っています。みんな、本当に理不尽な苦勞を強いられました。そうしたなかで「6名」が立ち上がり、今、裁判を始めました。それは素晴らしいことです。過去のこと、たとえば「水俣」にも学び、もっと力になりたい。もちろん「もう、孫のことは聞かないでくれ」「そっとしておいてくれ」と、そう言う人もいます。世論が動いて、そうした人びとをの心が解放されれば、と願っています。正直に言えば、力が及ばない、というもどかしさがあります。病院からの圧力も感じる。でも、これからだと思っています。

木田先生

生々しい傷を負った子どもたちの写真を見せていただいたことを、よく覚えています。あの子どもたちの、その傷は、治らないのですね。

飛田さん

なかなか、治らないですね。大変なことです。

——私は牧師です。覚えてお祈りしています。
今日は、本当にありがとうございました。

福島で甲状腺がん東電提訴へ 事故当時6〜16歳男女6人

東電電力福島第一原発事故による放射線被ばかの影響で甲状腺がんになったとして、事故時に福島県に居住していた十七〜十七歳の男女六人が、十七日、東京地裁に総額六億一千六百円の損害賠償を求める訴訟を東京地裁に提起し、弁護士に託して、子どもの時に甲状腺がんになった患者が原発事故を起因として東電を訴えるのは初めて。

（片山亨子）26歳女性 不安訴えを面
提起するのは、福島県や、時は六十六歳で、現在は郡山市などで住んでいた四、県内や東京都内で高校生など、県西部の会津地方など、会社員アルバイト、県東部の浜通りの両地域に「トとして働いていたり住んでいた各一人、事故当り。

六人は、福島県の県民健康調査などで甲状腺がんを診断された。二人は甲状腺の片側を切除、四人は再発により全摘し、放射線治療を実施または予定している。四回手術した八人に転移した人もいる。治療や手術で希望職種への就職を断念し、大学中退や退職を余儀なされた。再発だけでなく、結核や出産ができるかなど強い不安を抱えている。

原告は、福島県の県民健康調査などで甲状腺がんを診断された。二人は甲状腺の片側を切除、四人は再発により全摘し、放射線治療を実施または予定している。四回手術した八人に転移した人もいる。治療や手術で希望職種への就職を断念し、大学中退や退職を余儀なされた。再発だけでなく、結核や出産ができるかなど強い不安を抱えている。

原告は、福島県の県民健康調査などで甲状腺がんを診断された。二人は甲状腺の片側を切除、四人は再発により全摘し、放射線治療を実施または予定している。四回手術した八人に転移した人もいる。治療や手術で希望職種への就職を断念し、大学中退や退職を余儀なされた。再発だけでなく、結核や出産ができるかなど強い不安を抱えている。

事故後の（〇二二年四月一日まで）生まれた（県外避難者を含む）計約一千八百人を対象に、被ばくにより発症の可能性がある甲状腺がんの検査をしている。通常、小児甲状腺がんの発症数は年間百万人に一〜二程度とされるが、調査などでは、昨年八月までに約三百人が甲状腺がんまたはその疑いと診断された。医療費の全額は、国の財政支援や東電の賠償で創設した「県民健康管理基金」から交付されている。診断結果については、専門家会議は「将来治療の必要のないがんを見つけている過剰診断の可能性が指摘されている」としつつ、調査を継続している。

事故当時の（〇二二年四月一日まで）生まれた（県外避難者を含む）計約一千八百人を対象に、被ばくにより発症の可能性がある甲状腺がんの検査をしている。通常、小児甲状腺がんの発症数は年間百万人に一〜二程度とされるが、調査などでは、昨年八月までに約三百人が甲状腺がんまたはその疑いと診断された。医療費の全額は、国の財政支援や東電の賠償で創設した「県民健康管理基金」から交付されている。診断結果については、専門家会議は「将来治療の必要のないがんを見つけている過剰診断の可能性が指摘されている」としつつ、調査を継続している。

福島で甲状腺がん 東電提訴へ 事故当時6〜16歳男女6人
2022年1月19日 東京新聞 朝刊1面

計測所事業のここまでとこれから

東北ヘルプ理事 阿部頌栄

1. はじめに

2011年12月26日にスタートした、仙台市での「食品放射能計測所・いのり」の事業が、2022年3月で区切りを迎えます。仙台の計測所には3台の食品放射能計測機が設置されていましたが、この10年の間に、順次、福島県いわき市そして郡山市の計測所に移設してきました。最後に残された一台は、今、福島市内に移送することを念頭に、調整が進められています。これまで皆さまにお支えいただいた「食品放射能プロジェクト」の働きは、今後、福島県内を拠点として続けられることとなります。東北ヘルプは、引き続き福島県内の計測所全体の事務局の役割を担わせていただきます。その意味で、東北ヘルプの計測事業も「次の段階」へと進むことになるのです。

「食品放射能計測所・いのり」の働きは、福島・宮城の諸団体・有志により結成された「食品放射能計測プロジェクト」によって運営されています。「東北ヘルプ」は設立からこれに加わり、その最初の具体的な現場が「仙台食品放射能計測所・いのり」だったのです。

仙台で計測所事業を行ったことには大きな意味がありました。東北では、「ヒト」と「モノ」が、仙台に集まります。その特性を生かして、仙台の計測所は

これまで、より専門的な計測と情報の発信と丁寧なケアが模索され実践されたのでした（「東北ヘルプ」の川上事務局長は、「それは仙台の責任だ！」と、常々、言っていました）。

その結果、具体的には

- 杉本職員による、精密な技術を用いた、多様な資料の計測。
- 木村職員による、栄養・調理の専門家による実践的な対処法の提示。
- 笠松職員による、ケアの専門家による配慮された傾聴とサポート。

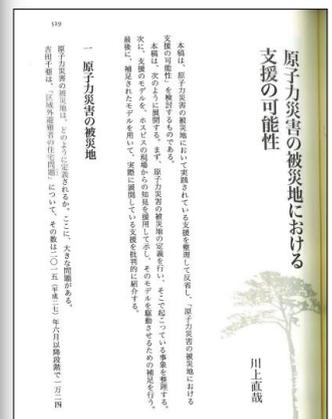
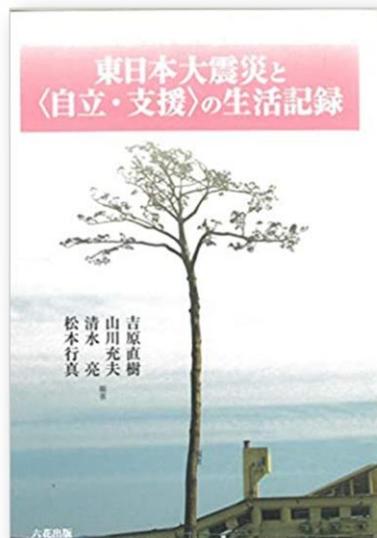
ということが、仙台で実現したのでした。それは素晴らしいことでした。実に、これらを通して計測事業全体の目標である「利用者の魂のケア」が具体化したのです。

そして、仙台計測所設立から10年が経ちました。その間に、計測所の財務状況は変わりました。それに合わせて、減員が余儀なくされました。その点を思うと、「東北ヘルプ」理事である私は、職員各位に「申し訳ない」思いを抱いています。そして、ついに、2022年3月まで奉職してくださいました笠松職員にも、退職いただく時となりました。お三方に、改めて、心からの感謝を表したく思います。

2. 論文「食品放射能計測所『いのり』による支援活動：東北ヘルプの原子力被災地支援」

「東北ヘルプ」事務局長の川上直哉牧師が、「食品放射能計測プロジェクト」について、学術論文の形でまとめてくださいました。それは右の書物に掲載されています※。

以下、その書評を記しまして、「食品放射能計測所・いのり」の働きについて、振り返りたく思います。そのことで、この4月以降も福島で継続される私たち「東北ヘルプ」の働きを、改めて皆さまの祈りに憶えて頂きたいと考えてのことです。



(1) モノグラフ

この論文には、いかに東北ヘルプが東日本大震災の被災者や支援者に対して活動を展開したか、がまとめられています。特に「食品放射能計測プロジェクト」と計測所の活動について、「モノグラフ」として、記されています。

「モノグラフ」とは何でしょうか。それは「一つの社会的単位、家族や団体を、その社会的文脈の中で詳細に記述した記録」である、とのこと。

(2) 「復旧」と「復興」の違い

まず筆者である川上牧師は、「東北ヘルプ」の津波被災地への支援の経緯を確認します。震災から(論文執筆当時)9年余りを経る中で、「復旧」と「復興」の違いを確認し、そして、それぞれの段階における「支援」の意味の違いを感得したことを語ります。

「復旧」は、「災害前」への回復を目指します。そして、「復旧」の中では、ある段階で「支援」は撤退すべきものと見なされます。

「復興」は、「災害前にその地域に存在していた課題」を災害後に克服することを目指します。ですから、「復興」の中では、「支援」はずっと必要とされるし、展開されるものとなります。

(3) 「あなた」と「わたし」の出会い

筆者である川上牧師は、特に後者の「復興」に注目します。そしてその中で重要な事として、「支援」の中で生まれる被支援者と支援者の関係に注目します。つまり、「あなた」と「わたし」の「出会い」と信頼関係こそが重要なのだ、と指摘します。

(4) 放射能災害への支援

この「復旧」と「復興」と「支援」、あるいは被支援者と支援者との出会いと信頼関係の理解を、筆者である川上牧師は、放射能災害への支援への大切な視座として設置します。

「東北ヘルプ」は2011年9月から、「食品放射能計測プロジェクト」と共に計測所を中心とした放射能被ばくへの支援を始めます。「プロジェクト」は、当初、資金的困難に直面し、辛うじて事業の継続がなされるという中で、何とか存続します。そうして特に2012～2014年には多くの利用者が計測所を訪れ、この間、仙台の計測所では毎月平均40件ほどの計測と、希望者へのケア、ならびに『栄養ニュース』の作成と発信が行われました。『栄養ニュース』には栄養学の知見や実際の献立のレシピなどが記されていました。これは甚大な災害禍の中でも無力感に落ち込んでしまうのではなく、ささやかでもこれに対処し、絶望しないための足場として、日々の知恵を発信することを目指したものでした。仙台の計測所は、福島県の郡山市といわき市に計測所を産み出しました後、2015年以降、大幅にその活動を縮小しながら、研究とケアの機能を維持して行ったのでした。

仙台の活動を基礎に生まれた「いわき計測所」では、計測事業に加えて、特に「帰還困難区域」に指定された福島県浪江町からの避難者の方々のコミュニティスペースとしても、機能するようになりました。「浪江ピースの会」と名付けられた働きは、仮設住宅に入り・出て行く避難生活の変化の中で、皆さんの関係を維持することに確かな役割を果たしました。

仙台の「計測所分室」が建てられた郡山市では、食品放射能計測事業と共に「ホットスポットファインダー」を用いた空間線量の計測およびそのマップ化といった作業を展開しました。これは市内に散在する「ホットスポット」をデータによって可視化し、傾向を整理して、可能な限り生活の中で被ばくする危険を避けることを目指して行われたものでした。

いずれの働きも、計測所が単なる計測を目標とするのではなく、「魂のケア」の場となることを目指していた中で具体的に活動がなされたことを示しています。こういった支援活動を展開する中で、筆者である川上牧師は、放射能被ばく地での支援に一つのモデルを提示しています。

(5) 「不安」と「尊厳」：論文の結論

前述の「復興」と「支援」のモデルの中で、特に放射能被ばく地の被災者は、「不安」に直面することを余儀なくされます。そして、ここで支援者は、被災者と共に、この「不安」に向き合うことになるのです。筆者である川上牧師は、「不安は、その人の『尊厳』が傷つけられているために起こるのだ」と指摘します。そして「この『不安』は、人と人との出会いの中でのみ、解消される」こと、つまり、「あなたがいてこそ私 / 私がいてこそあなた」という関係が生まれる中でこそ、不安は解消される。「改めてこの事を、放射能被ばく地での『復興』と『支援』の核とすべきだ」と、筆者である川上牧師は提言し、結論としていました。

(6) まとめ

これは「論文」として書かれた「モノグラフ」ですが、ここに描かれたものを読む時、改めて私自身の震災での経験が、ポツリポツリと、思い起されるように感じました。読者にそうした体験を引き起こすことが、きっと「モノグラフ」で出来事を記すことの大切な意義なのでしょう。つまり、これを読む人は皆「同じような記憶」を呼び起こされ、それが相対化され、そしてそれを整理する事ができる。そうして読者は、改めて自身の現場に向かうための足場を獲得するのでしょうか。この論文を通して、「現場の声の記録」である「モノグラフ」の大切さを思わされました。

※川上直哉「食品放射能計測所『いのり』による支援活動――東北ヘルプの原子力被災地支援」『東日本大震災とく自立・支援>の生活記録』、(六花出版、2020年)、759-94頁。
「著者引き当て」として、まだ10部ほど、この本が「東北ヘルプ」にございます。
定価の半額程度で、お分かちできると思います。ご希望の方は、どうぞ、お知らせください。

3. 終わりに

今、食品放射能計測事業が大きな転換点を迎える中で、どうしても思い出されることがあります。仙台の計測所の開所式で、初代所長をお勤めくださった保科隆牧師が分かち合ってくださいました聖書の言葉です。それは、『旧約聖書』の一節でした。

見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。
わたしが選び、喜び迎える者を。
彼の上にわたしの霊は置かれ
彼は国々の裁きを導き出す。
彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。
傷ついた葦を折ることなく
暗くなってゆく灯心を消すことなく
裁きを導き出して、確かなものとする。

(新共同訳聖書「イザヤ書」42章1-3節)

これから計測所の仕事を始めようとする、その中で、「暗くなっていく(くすぶる)灯心を消すことなく」とは、不思議ではないでしょうか。もっと威勢よく、元気に活動を始めてもよいのではないのでしょうか。そうかもしれません。しかし、この「仙台計測所開所式」では、そこにいた人々の誰もが、この聖書の言葉に深い共感を憶えていました。そのことを、私は記憶しています。

そして実際、計測所の働きは、この聖書の言葉の通りになりました。決して派手に活動するわけではない。ただ、ともかく訪れる方の魂を支えることを目指して、ひたすら灯を絶やさず。仙台から福島に計測所の活動の中心を移す中でも、この精神は変わらずに存在しています。

これまで共に歩ませて頂いた「食品放射能計測プロジェクト」の働きを引き継ぎ、これからも多くの方々と共に、放射能災害の問題と向き合い、そこから立ち上がることを目指したいと願っています。

(7)

次の原子力災害への備えとして

——「仙台食品放射能計測所・いのり」10年の歩みを回顧して——

2022年3月16日、福島県沖で巨大地震がありました。また、福島第一原子力発電所は不具合を生じ、17日お昼頃まで、緊張状態が続きました。原子力災害は、いつでも起こり得る。そのことを痛感させられた出来事でした。

もし原子力災害が起こったら、どうすればよいのか。

東北ヘルプは2011年の「3.11」の現場に立って、支援活動を展開してきました。原子力災害の被災地支援について記せば、それは以下の通りでした——

- 2011年5月、東北ヘルプは「福島県」への支援を開始しました。
- 2011年9月、東北ヘルプが事務局となり「食品放射能計測プロジェクト共同運営委員会」が立ち上がりました。
- 2011年12月、「食品放射能計測プロジェクト共同運営委員会」は仙台市に「仙台食品放射能計測所・いのり」を立ち上げました。その計測所での活動を基礎にして、福島県の二か所（いわき市と郡山市）に食品放射能計測所が開設されました。
- 2022年3月15日、「仙台食品放射能計測所・いのり」は、その活動を終えることになりました。今後は「いわき市・郡山市」の計測所での活動を展開して行きます。さらに「福島市」での新しい活動を開始する準備も進められています。

「仙台食品放射能計測所・いのり」の10年余にわたる活動の中で、笠松さん・木村さん・杉本さんという三人の職員が奉職してくださいました。今回、久しぶりに三人が揃い、仙台計測所の「昔話」をしてくださいました。今後の活動の軸になる「郡山」の計測室長である木田恵嗣先生（ミッション東北 郡山キリスト福音教会 牧師・「東北ヘルプ」理事）にも加わって頂き、お三方の話をまとめて頂きました。そこには、「次の原子力災害」への教訓が豊かに語られていました。

私たちの活動が「12年目」に入っていく、その切り替えの時に、最初の活動であった「仙台計測所」が閉じられて行く。「11年間」の活動の背後にあった大きなお支えに感謝しつつ、以下、四人の話し合いをご紹介します。

(2022年3月17日 川上直哉 記)

話し合いは2022年3月18日に

仙台計測所と郡山計測室をオンラインで結んで、行われました。

写真左から 木田先生・木村さん・笠松さん・杉本さん・川上です。



1. 計測所と、三人の計測所員

——「仙台食品放射能計測所・いのり」は、いよいよ、その役割を終えて行きます。しかし、福島県の郡山市と いわき市 に設置された二つの計測所は、これから、まだ活躍して行きますね。

木田先生：

間違いなくそう思います。10年経って、まだ、測りたいもの、測らなければならないもの、いっぱいあるのです。そして、その活動の基礎に、仙台の計測所の事業がありました。その仙台計測所が、いよいよ終わる。10年の活動に感謝を覚えています。

——杉本さんが計測所の職員をしてくださったのはいつ頃だったでしょうか。

杉本さん：

私は2011年12月から2015年まで、働きました。

——木村さん、笠松さんは？

木村さん：

2011年12月から2015年3月まで、です。

笠松さん：

私は2012年から働き始めました。

——そして、この3月で笠松さんが退職されて、仙台の計測所の終了となります。振り返ってみますと、2011年12月、仙台にある「エマオ」ビルの広い部屋を借りて、計測所がスタートしました。そして2013年春頃、日本基督教団仙台北教会の敷地内へと転居しました。そして、2015年に今の場所（エマオ敷地内 中庭別棟2階）に引っ越してきたわけです。そして今、2022年3月、仙台の計測所は、閉じることになりました。

木田先生：

プロジェクトが立ち上がったのは、2011年9月、郡山コスモス通り教会でしたね。その時、私は

参加していませんでした。その次の年、私は福島市の教会から郡山市の教会に転任しました。そのすぐ後に、皆さんが私の教会を会場にして計測所の運営委員会を持ってくださいました。そこからの関わりとなって、今は私も運営委員となっています。そして2013年夏、郡山に「分室」ができ、そして、杉本さんが郡山に派遣されたのでしたね。

杉本さん：

本当に申し訳ないことですが、正直に言います。その時、私は「戦々恐々」としていました。大学院で学んだ「放射能」の知識からすれば、その頃の郡山市の汚染状況は「恐ろしい」レベルだったのです。

——まだ、除染が始まったばかりの頃でしたね。

木田先生：

家の中でもガイガーカウンターは警報音を鳴らし続けていたのです。教会の敷地内の土壤は除染した後でも、「キログラムあたり8千ベクレル」程度ありました。つまり、「国の指示に従って厳重管理をしなければならないレベル」です。教会の近くにある公園から「キログラムあたり1万ベクレル」を超えた土も発見されました。

杉本：

計測機を持ってきてくれた「株式会社 テクノエピー」の技術者の方も、はっきりと「不安を感じる」と言っておられたと思います。

——杉本さんは、大学院博士課程で放射能の研究をされていましたね。原発事故前に学んだ放射線防護の知識からすると、その時の福島県中心部は「恐怖」を感じるレベルで、深刻に、汚染されていた。でも、そこに「日常」を過ごさなければならない住民が、100万人以上も、いた。…その辺りから、今に続く矛盾と混乱が根を張っていった、という感じですね。

木田先生：

そうした中で子育てをされるお母さんたちは、本当に苦しんでおられました。そこに、栄養士の木村さんが派遣されておいでになったのです。郡山まで来てくださって、計測所を利用してくださるこの地域の「お母さんたち」と話をしてもらったことを、よく覚えています。

木村さん：

あのようにたくさんのお母さん方とお話をすることが出来たこと・寄り添い合える機会を与えられたことを、本当に感謝しています。とても懐かしく思いますし、昨日のことも感じます。

母親の子どもを思う気持ち、将来の健康を願い守りたい気持ちが、痛い程伝わりました。私も同じ気持ちでした。毎日の暮らし、特に食事作りの点において微力ながらも励ましやヒントのひとつになれたなら、本当に幸いです。

木田先生：

この地域の方々には、皆さん、本当に悩みながら暮らしていました。木村さんは栄養士でしたから、その専門家の立場からの助言が、本当に助けになったと思います。

木村さん：

あれからも、計測所に、皆さん、集われましたか。

木田先生：

そうですね。それから、通学路の放射線を心配して、放射線量を測る相談も頂きました。今は、ずいぶん、落ち着いてしまいましたね。私たちの側の資金も無くなって、働きは止まっています。保養も、やっていたのですが、止まりました。でも、コロナになる前は、一年に一度は「再会キャンプ」を続けていたのです。それも、お休み状態です。

——せっかくのつながりを継続できないのは一つの悩みですね。

木田先生：

はい。大変な時を励ましあって進んだのです。なんとか、その関係が続くといいのですが。

木村さん：

私たちが今、こうして久しぶりに会うと、懐かしく思うのです。皆さんもきっと、そうですね。

——仙台計測所が開所して間もなく、木村さんには「栄養ニュース」という小さなミニコミ誌を作り、相談に来た方に、お渡しできる体制を整えました。それは発展して、メール配信で広くお届けできるようになり、それが出版社の方の目に留まり、書籍にもなりましたね。そうした中で、郡山にも行って頂きました。

木村さん：

はい。そうした過程で、毎日、勉強をさせてもらいました。「不安な方にもきちんと届くように」と願いを込めて、「栄養ニュース」を作ったのです。「健康のことを伝えられたらいいな」「寄り添えたらいいな」と、いつもそう思っていました。郡山で出会ったお一人おひとりのように、小さなお子様を抱えた親御さんの現実を思い浮かべながら、まとめていったのです。計測所で学び、実際に放射線を測って、そして、現実と向き合うことになった。それから、世界中から発信される情報にも向き合いました。何度も何度も、不安になりました。でも、計測所での仕事は、その不安を咀嚼する機会になったのでした。特に「栄養ニュース」は、一緒に泣いたり励ましたりする媒体となったと思います。

——そんな木村さん・杉本さんの働きを、上手にまとめて下さったのが笠松さんでした。

笠松さん：

どうでしょうか・・・でもとにかく「この三人と一緒に働く」と定まってから、よく考えますと「みんなクリスチャン」で、楽しみもあり、安心もあったのだと思います。なんでも話し合いながら、仕事をしました。「わからない」「手探り」の業務でした。一つひとつ、ゼロから組み上げたのです。



木村さんの「栄養ニュース」をまとめて刊行された書籍。『食卓から考える放射能のこと』いのちのことば社、2013年。

2. 計測の思い出

——計測の思い出を、お話しくださいますか？

杉本さん：

ラドンガスによる誤検出の影響を調べようとして温泉の水を調べたことがあります。すさまじい量のラドンガスで、強い放射線が出ていることを確認したときは、驚きました。

木田先生：

あの時は「がんによく効く」という温泉水をもらいに行きました。怪しまれて、断られたりして。

杉本さん：

今、思い出しました。雪の降った日には、自然放射線の量が増す事がありますが、それは自然なことなのです。でも、それを原発事故と結び付けて誤解した人が慌てて情報発信して、不安が広がったことがあります。それは、騒ぎになったのです。

笠松さん：

そうでした。そして杉本さんが説明して、たくさんの方が平静を取り戻しましたね。

木村さん：

ある日、岩手県のある場所で採取した「落ち葉と腐葉土」が「8,000Bq/kg」を超えていて、それは考えられない数字でした。どう受け入れて伝えて行けばよいのか、悩んだものでした。次々と、知らないことと向き合い、不安な出来事も多かったのです。でも、そうした毎日を毎朝の礼拝が支えました。「神様に向かって仕事をしている」ということは、私たちが互いを励ましあう基盤になったのだと思います。ここで起こった「驚いたこと」の数々についても、それをショッキングではなくお伝えすることが大事だと学んだ気がします。その意味で、今日のこのインタビューは、とても有意義だと思いました。

——それから、2014年冬に、猪を計測しましたね。若い子どもの、2歳くらいの猪でした。「いちばん美味しい頃だ」と、福島県の方がおっしゃっていました。

*イノシシ肉の計測結果（福島県原発約15キロ圏内）

計測日：2014.12.3~2014.12.8

<内臓部>

部位（推定）	重量（g）	結果（Bq/kg）
肺	257	230.38
心臓	298	304.39
胃	401	179.77
肝臓	438	236.67
脾臓	120	292.87
腸	165	88.48
胆嚢（+肝臓）	40	313.70

左：「猪」の計測結果。

右：仙台から計測機器を移設した「郡山食品放射能計測室」ここ郡山市と、いわき市で、計測が続けられています。

木村さん：

そうでしたね。「前足」と「後ろ足」と「内臓」が届いたのでした。

木田先生：

「解体するから、仮設住宅に来てくれ」とお声がけを頂いたのです。でも、予定が合わなくて、「仙台に送ってください」とお願いしたのです。

木村さん：

そして、ある日、計測所の冷蔵庫に発泡スチロールの箱が入っていたのです。開けたら「血だらけ」で・・・衛生的には危険なのです。自分が責任をもって切り分けました。凶鑑を見ながら、内容を確認して、計測をしました。その時の「匂い」は経験したことのない生臭さでした・・・それまでのみんなの経験がそこで生きて、無事に計測ができたのです。

笠松さん：

消毒液をもって木村さんの後ろをついて回っていたことを思い出します。

木村さん：

全部計測するのに5日を要しました・・・途中で、いろいろ、感覚が麻痺しました。

——そして、その計測結果から、今回の原発事故による「内部被ばく」について、それが「本当に起こる」と確認できました。

杉本さん

はい。猪は、虫や木の実を土と一緒に飲み込みながら食物を摂取すると言われていています。その猪の内臓や筋肉は、「仙台の土壌」並に、汚染されていました。食べ物や飲み物から筋肉や内臓に放射性物質が移行することが確認されました。

木村さん：

筋肉にも、高い数値が出ていました。文献にある通りでした。そこから所謂「生物濃縮」の様子が想像されて、汚染の現実を知らされた計測でした。

——でも、なかなか、「汚染の現実」は、伝わらないのですよね。



3. 原子力災害の被災地で、必要なこと

木田先生：

震災の直後の混乱の時期に、計測は不可欠だったと思います。「何を食べていいのか」「食べさせていいのか」と、お母さんたちは、本当に、叫んでいました。そうしたお母さんたちに寄り添うことができました。それは、本当によかったです。そうした中で、木村さんの「栄養ニュース」が、広く活用されたのでした。

——計測所の10年を振り返り、これからも見据えて、今、どんなことをお考えになりますか。

木田先生：

「教会が計測所を運営する」ということは、実際、大変な話だと思うのです。それが可能になって、これだけの期間、それを継続し、そしてまだ活動が続く。それは大きな意味があると思うのです。実際、福島現場では、いよいよ、土壌なども含めて、計測が必要とされてきます。私は、これを、どうやって継続するか、いろいろ考えているのです。その時、仙台計測所が残してくださった事柄が、本当に生きています。「誰でも測れる」というところまで、計測機を使いこなしたいと思っています。放射能は見えないものです。それが数字になって見える、ということは、とても大切だと思うのです。猪の肉でも、土壌でも、計測ができるのです。そうすることで、普段見過ごす場所に「危険」を見つけられます。それはとても大切に思われた10年でした。

杉本さん：

放射能測定装置を扱う、ということの難しさを思います。マニュアルがあれば、誰でも計測できます。もっと難しいのは「出た数字をどう解釈するか」「出た数字をどう扱うか」です。どうしても「間違い」も起こります。そして、情報は、一度流れると、取り返しがつかないところがある。そうした難しさを、自分は学んだと思います。なにしろ、災害時には、簡単にパニックが起こるのです。ですから、「数値の解釈と扱いの難しさ」を自覚することが、とても大切に思われます。そしてそのために、地域の人の不安に寄り添う、という姿勢が必要です。不安を取り除くことはできないかもしれません。でも、それを軽減する、ということに意識を向けました。

木村さん：

これから、同じことがあるでしょう。その時に、ぜひみなさん「ひとりの人」として、情報を色々な角度から調べることを心掛けて頂きたいです。

「一つのこと」にこだわると、知ることが限られます。情報を得るスピードが遅くならないようにして、得られた情報から生活の中へと、できることを考えることです。人の体は食べ物と水で作られて、新しくされていきます。何を選び取るか(摂るか)、その大切な意識、感覚に立ち返るきっかけと捉えて、必要な情報を受け取って欲しい。そして、たくさんの災害の中に「原発事故」があるという事実を忘れずにいて頂きたい。その時、どうするか、普段から考え、ネットワークを広げることが大事だと思います。

笠松さん：

計測所を立ち上げた時のことを思い出します。「教会としての働き」を掲げて、大事にしたいことをみんなで挙げて確認しました。その結果、「寄り添うこと」と「開かれた場所にする」を大切にしよう、と決めました。その結果、だと思います。色々な方が利用してくださったのでした。それは本当に大切なことでした。農業をやっている方、原発に関わっている方、おじいちゃんおばあちゃん、いろいろな世代、と、たくさん、関わって下さいました。初めてのことであったので、何をどうしたらよいかわからないけれど、計測をして、数字を見ている時、数字以上のものを、みんなで見つめたのでした。つまり「数字の背後にあるもの」をしっかりと見る、そういう場所になったと思うのです。そうした場所は、きっと、必要だったのだと思うのです。

木村さん：

そうですね。数字だけではなく、その方の悩みに寄り添い、生活や暮らしそのものを、数字を手掛かりに、見て行く。食事のこと・心のこと・その方の毎日のことを考えて、どう励みますか。そこまで、この計測所では考えて活動を進めたのでした。

木田先生：

11年という年月を経て、今、また皆さんに会えて、大切なことを振り返ることができ、嬉しかった。光栄でした。色々なことを思い出しました。いろいろな人を、思い出しました。数字の扱いの難しさは、ほんとうにそのとおりでした。数字を、よくかみ砕いて下さいました。そのご苦勞も大変なものでしたね。皆さん、本当によくやってく下さいました。

——仙台には、そういうチームが生まれたということ、その素晴らしい出来事をここに記録できました。この出来事を土台に、これからの福島県での計測事業を展開します。今日は、ありがとうございました。

あとがき：津波被災地の二つの活動

「東北ヘルプ」のニュースレターは、「イースター」と「夏（総会終了後）」と「クリスマス」に発刊しています。このところ、毎回、「津波被災地」の特集と「原子力災害被災地」の特集と、交互に編集してきました。これは意識してのことでもなかったのですが、このまま続けば、次回は「津波被災地」の特集になろうかと思いません。

「津波被災地」の支援活動は、地道に続けられています。次回の予告のようにして、ここに二つ、ご紹介します。

一つは、「思い出のランドセルギフト」プロジェクトです。これは「石巻広域ワイズメンズクラブ」様が主体となり、東北ヘルプがお手伝いをしている事業です。

2011年、津波の被災地には、とてもたくさんの方が心を寄せられました。その心を込めた支援物資の一つが「ランドセル」でした。突然「すべて」を失った子どもたちを思って、「ライフワークサポート 響」の阿部さんが全国に呼びかけ、3000個以上のランドセルが届けられました。すべて、「中古」のランドセルでした。「お手紙」を入れて送ってくださった方もいました。「愛着のある、でも、もう使わなくなったランドセルを、使ってほしい。あなたを思っている人がいる、と、知ってほしい」という思いが、届けられたのです。阿部さんはそれを大いに配りましたが、しばらくすると「新品」のランドセルが、業者さんから被災地へ贈られるようになりました。それで、「中古」のランドセルが130個ほど、残ってしまった。そこに込められた思いの重さを考えると、「廃棄」することができない。



塩釜のランドセル倉庫にて。
右から、ワイズメンズクラブの清水さん、真ん中に響の阿部さん、そして、左端に川上。

2021年、石巻で支援活動を続けている「石巻広域ワイズメンズクラブ」は「政変によって不安にさらされているアフガニスタンの子どもたちにランドセルを贈ろう」というプロジェクトを開始されました。「支えて頂くありがたさを知った私たちは、支える意味を知っている。その思いを子どもたちに継承しよう」というプロジェクトです。その先に「復興」ということも見えてくる。そんな志を、私たち「東北ヘルプ」にもお手伝いさせて頂きたい。そう話し合っていましたところ、「ライフワークサポート 響」の阿部さんから、連絡がありました。「ランドセルを、どうしたらよいか」という相談でした。今、このランドセルをアフガニスタンに送る段取りをしています。感染症その他で足踏みをしながら、でも、その先に「復興」を見据えて、活動は続けられています。



ランドセルはまず、塩釜から石巻へ運ばれました。一つひとつ清掃し、箱に詰めました。ランドセルの中には、心のこもったお便りが、いくつも入っていました。

もう一つは、石巻の「公益活動団体 Love is action」の皆さんが取り組む「コミュニティーガーデン “黄金浜おむすび村”」の取り組みです。

3000人もの津波犠牲者を出した石巻市に「渡波」という地域があります。そこにあった家屋のほとんどが津波によって流されました。今もまだ、そこには「空地」が延々と広がっています。「もう住居は建てられないのではないか」という予想もありましたが、町に人は戻ってき

ました。結果、「荒涼とした空地」と「新しい住宅」が混在することになりました。その渡波に、憩いの場所を造りたい。黄金浜という地域に、その思いが今、集まって「Love is action」という団体が結成されました。

「石巻市には、同じ志を素晴らしい形で実現した『雄勝ローズファクトリーガーデン』があります」と、「Love is action」代表の栗野さんがおっしゃいます。「そうした憩いの場・緑の庭を造りたいのです」と。



上の写真の一番手前が、栗野さん。
真ん中に、「Be-1」のエリック宣教師。
「憩いの場」となる「空地」を見つめて

渡波には、「Be-1」というキリスト教支援団体があります。この「Be-1」の皆さんは、「子どもの公園」を渡波地域に設置した経験がありました。2022年3月2日、「東北ヘルプ」は「Love is action」の皆さんと「Be-1」の皆さんをつな

ぎ、その経験と志を分かち合ってくださいました。そしてその後、「雄勝ローズファクトリーガーデン」をお訪ねしました。代表の徳水さんは「突然」の私たちの訪問を喜んでくださり、ご助言と励ましとお祈りを頂いたことでした。

これからも「東北ヘルプ」としてご一緒に進められればと願っています。

以上、二つの「津波被災地」の活動をご紹介して、「あとがき」とさせていただきます。それを踏まえて、表紙の写真について、記させていただきます。表紙は、「気仙沼の2022年3月10日」でした。それはとても美しく電飾され、「復興」を体現しているように思われました。でも、その「電飾」を取り囲む旧市街は、本当に寂しい雰囲気になっています。震災前に「7万5千人」いた気仙沼市は、ついにその人口が「6万人を割り込んだ」のです(2020年8月1日現在で、5.98万人と発表されています)。輝く「電飾」は、その陰の深さと暗さを思わせるように思います。そしてその中に留まり、踏ん張っている方々の顔が目に浮かぶのです。

私たちも、現場に留まることが許されています。引き続き、お祈り・ご支援を賜れば、本当にうれしく思います。みなさまと共に、新しい「東北ヘルプ」の活動を進められればと願いつつ、この「イースター号」を終えたく思います。

2022年3月18日 川上直哉 記



会計報告

2011年3月18日に活動を開始した「東北へルプ」は、「食品放射能計測所」を設立する2011年末頃、海外からの支援金をお預かりし、予算が非常に大きくなりました。その支援金は「プロジェクト」毎の指定献金であり、年限が指定されていたものから、2015年頃から、予算は急速に小さくなったのでした。

2018年には、海外からの支援はすべて終了しました。それでも、2011年からずっとお支えくださっている「小口」といっても、本当に大きく貴重な一つひとつの献金)が、今でも500件近くあり、活動が支えられています。心から感謝いたします。

2022年中には、「東北へルプ」の形態を大きく変え、「仙台計測所を閉じ、事務局を廃止する」措置を講じます。結果、固定費支出を「100万円程度」減少させることができる見通しです。このことで、「福島県内の放射能計測事業をはじめとする原子力災害被災地支援」と「復興に取り組み津波被災地支援者の支援」を継続する、という計画です。引き続きのご支援を、どうぞよろしく願います
(2022年3月24日 川上直哉 記)

収支計算書(全体)

2021年4月～2022年3月

2022.1.31現在
(単位:円)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
会費収入	-	-	5,000	-	5,000	-	-	-	-	-	-	-	10,000
献金収入	696,000	260,368	456,788	302,940	263,000	546,100	468,500	429,520	1,275,017	423,500	-	-	5,121,733
預金利息	3	-	-	-	8	-	3	-	-	-	-	-	14
収入計	696,003	260,368	461,788	302,940	268,008	546,100	468,503	429,520	1,275,017	423,500	-	-	5,131,747
給料手当	180,000	180,000	180,000	180,000	230,000	180,000	180,000	180,000	180,000	230,000	-	-	1,900,000
法定福利費	11,408	11,408	11,408	31,082	11,258	11,408	11,408	-	-	-	-	-	99,380
新聞図書費	21,242	11,749	25,820	31,841	24,079	28,861	29,400	15,523	13,338	38,245	-	-	240,098
通信費	49,356	36,406	31,273	29,252	46,617	37,237	37,827	35,842	25,315	44,882	-	-	374,007
支払手数料	6,250	3,568	3,803	4,576	3,585	10,245	7,002	4,158	21,336	6,594	-	-	71,117
外注費	38,500	38,500	38,500	38,500	71,500	38,500	38,500	38,500	38,500	38,500	-	-	418,000
事務費	65,812	46,461	35,983	34,074	47,241	52,288	45,417	33,933	55,118	49,312	-	-	465,639
広告宣伝費	70,791	-	-	-	89,659	-	216,992	-	122,701	99,434	-	-	599,577
旅費交通費	80,996	17,780	18,930	17,460	12,090	36,185	69,628	9,170	38,998	40,170	-	-	341,407
燃料費	20,000	16,500	10,000	14,000	16,000	19,000	24,000	6,000	24,000	33,124	-	-	182,624
会議費	57,897	15,019	5,580	8,000	6,970	12,380	22,130	8,260	8,700	5,630	-	-	150,566
支援費	260,260	208,826	122,153	489,622	65,412	111,503	91,408	207,480	57,500	17,080	-	-	1,631,244
支出計	862,512	586,217	483,450	878,407	624,411	537,607	773,712	538,866	585,506	602,971	-	-	6,473,659
収支差額	-166,509	-325,849	-21,662	-575,467	-356,403	8,493	-305,209	-109,346	689,511	-179,471	-	-	-1,341,912
											前期繰越		3,813,274
											次期繰越		2,471,362



支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代 表 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

事務局長 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

監事 本村大輔（救世軍泉尾小隊）

小河義伸（八王子めじろ台バプテスト教会牧師）

※肩書等は、すべて2021年11月末日現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP



Per crucem ad lucem（十字架をって光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : sendai@tohokuhelp.com